

B 5 歯科受診がこどもにおよぼす影響について

○水上由紀子、岩男 好恵、松田久美子
国武 哲治、柏木伸一郎

小児歯科柏木医院・福岡市

【目的】小児歯科の処置内容は、抜歯や歯髄処置から充填や予防処置といった、こどもにとって負担が少ない処置の割合が増えている。しかし、近年の初診患者を見ると1～3歳が最も多く、より低年齢化の傾向を示している。このことより、こどもへの対応が、今後の重要な問題になると考えられる。そこで今回、過去の歯科受診が患児にどのような影響を及ぼしているのかを知り、それを今後の臨床に活かす目的でアンケート調査を行った。

【対象及び方法】対象は、定期管理を長期間続けている患児の内、調査時の年齢が9歳以上の男児49名・女児62名の計111名である。これらの患児の初診時年齢は、1～8歳であるが1～3歳が約60%を占めていた。アンケート内容は、過去と現在の歯科に対するイメージ、歯科でのいやだった経験、歯科受診の必要性などであり、患児自身にこれらの項目についてアンケート用紙に直接記入してもらった。

【結果及び考察】「過去歯科がいやだと思ったことがある」と答えた患児は、約70%であった。しかし、「現在歯科に来ることを恐いと思うか」という問いには、全然恐くないが約80%、少し恐いが約20%であり、恐いと答えた患児はいなかった。また、「歯科受診は必要と思うか」では、必要と思うが約95%であった。これらの結果より、過去の歯科でのいやだった経験も、定期管理を繰り返して行くことで徐々に薄れ、よりプラスなイメージに転換できる可能性が示唆された。

B 6 乳歯並びに幼若永久歯に対する歯冠修復処置に関する実態調査 —10年前との比較—

細矢由美子、○柏原陽子、富永礼子、
西口美由季、福本 敏、後藤讓治

長崎大・歯・小児歯

目的：過去10年間における歯冠修復処置法の推移について調査する事を目的に本研究を行った。

調査方法：1994年度内に長崎大学歯学部病院小児歯科診療室に来院し、歯冠修復処置を受けた患児580名を対象に、乳歯並びに幼若永久歯に対する歯冠修復処置に関する実態調査を行った。調査結果を患児の年齢別、処置歯の診断名別及び歯種別に分類し、歯冠修復法の種類並びに窩洞形態などについてまとめた。さらに、これらの結果を1984年度における既報^{1,2)}の結果と比較した。

結果及び考察：1) 年齢別被験者数は、乳歯では、1984年度は、3歳をピークに2～5歳が多かったが、1994年度は、5歳をピークに3～7歳が多かった。永久歯では、1984年度は、7～9歳をピークに6～10歳が多かったが、1994年度は、9歳をピークに7～12歳が多かった。2) 乳歯に対する歯冠修復応用状況は、1984年度は、コンポジットレジン充填：Co-Re充填(37.5%)、既製金属冠(28.8%)、インレー(16.6%)、アマルガム充填：Am充填(11.3%)の順であり、1994年度は、Co-Re充填(60.3%)、インレー(21.0%)、既製金属冠(14.1%)の順であった。3) 永久歯に対する歯冠修復応用状況は、1984年度は、Co-Re充填(52.1%)、Am充填(22.5%)、インレー(19.0%)であったが、1994年度は、Co-Re充填(76.7%)、インレー(11.1%)、グラスアイオノマーセメント充填：G-Ionomer充填(6.7%)であった。4) 乳臼歯並びに永久臼歯ともに、隣接面を含む窩洞中、Co-Re充填が占める割合は、1984年度と比較し、1994年度では30%以上も増加していた。5) 1984年度と比較し、1994年度では、Co-Re充填の使用頻度が増加していた。一方、Am充填の使用は皆無であった。また、G-Ionomer充填が新たに使用されていた。

文献：1) 細矢由美子ほか：本学小児歯科診療室における各種歯冠修復処置に関する実態調査 (I) 乳歯歯冠修復処置、小児歯誌、26：589-600, 1988。

2) 細矢由美子ほか：本学小児歯科診療室における各種歯冠修復処置に関する実態調査 (II) 永久歯歯冠修復処置、小児歯誌、26：601-610, 1988。